

西新井税務署長賞

「支え合う社会のために」

足立区立 第十中学校

三年 篠田 心陽

「税金って何だ？」

未成年の自分にとって税金は関係のないものだとかんがえていた。私にとって一番身近なものは消費税だが、お菓子ひとつ購入しても税がかかり、金額の大きいものを購入すれば税の額も大きくなる。両親の給料からは所得税が引かれる。税金の使い道よりも、お金が取られるというマイナスなイメージが強いのが理由だ。

しかし、あることをきっかけで私が抱えている税金のイメージが変わった。今年になり、祖母が初期の認知症だと診断された。テキパキと家事をこなす祖母だったが、何年生になったのか聞かれることが多くなり、話の内容をすぐに忘れてしまう様子を目の当たりにして、どこか淋しく悲しい気持ちになった。膝も悪く、自宅の階段から落ちたこともあった。それでも風邪をひいたと伝えれば、それを忘れず電話をかけてきて心配してくれた。私の体調を本当に心配してくれていると感じ、覚えていてくれることが嬉しかった。少しでも認知症の進行を食い止めたい思いで、週一回のデイサービスの利用を開始し、階段に手すりを付ける住宅改修を行った。そこで介護保険が適応され、負担額が大きく軽減されたのだ。母は「家族が

負担する金額が少なくなることで、おばあちゃんに十分なサービスを受けさせてあげられる」と言った。

私はこの出来事を通して、社会保障制度を知った。社会保障は、社会全体でお互いに支え合う制度で、私たちの生活や健康を守るために欠かせない制度だ。介護の他に、私たちが幼い頃から受けてきた予防接種、医療費も同様で、誰かが納めた税金からかかる費用を負担してもらっている。税金に関して無知であつた自分を恥ずかしく感じた瞬間だつた。こんなにも、私の生活は税に支えられていたのか。

現在の日本では「少子高齢化」が進み、高齢者が増える反面、近い将来の働き手となる子どもの出生率が下がっていることが大きな問題となっている。これからの日本の税のあり方を考える上で、高齢化によつて社会保障関連の費用がさらに増加することは必然であり、重要な課題のひとつだと考える。

自分のおこづかいから何かを買えば、私自身も納税者となる。しかし、中学三年生である今は教育や医療だけでなく、道路整備や公共施設整備等の多くの場面で、祖父母や両親他の見知らぬ誰かが納めた税金に支えられて生活をしている。私たちの未来のために、私ができることは何か。「考えない」、「見ないふりをする」のではなく、しっかりと意識して見ていくことだろう。社会の課題、税金の使われ方、税の種類、それら税制度を正しく理解することが必要だ。祖父母や両親に代わって誰かを支える立場になった時、正しく納税し、未来に繋いでいくことが大切な役割だと考える。